

第四卷あらすじ

コボルの仲間と共に国に還ってきたサムは、ゼムラによって息子ハン王子の訃報を知らされます。そしてその時、サムは、ゼムラに対する疑念を抱きます。

サムは孫のナジムを部屋に呼び、そこで、ゼムラがハン王子を利用しながら「マギラ」を国の中に広めていたこと、そしてハン王子が病に倒れてからは、ゼムラの思いのままに国の政策が操られて行ったことを知らされます。

サムは、七人の男達を部屋に呼ぶと、ナジムに、この国に起こっていることを、自分に話すように七人の男達にも話してほしいと願います。

ナジムはそれを察し、身の回りに起こった出来事を語り始めます。

――ナジムの母サラと祖母ヨキ王妃は、ナジムを「マギラ」の底知れぬ力から守るために、街に出すこともなく、自然の中に遊ばせながら育てて行きました。

しかしナジムは、15才を迎える頃になると、自然の中ばかりに気持ちを止めることができなくなり、ある日、城を抜け出して街へ向かいます。

そして、初めての街で出会った不思議な少女によって、街の魅力に惹きつけられて行くことになりましたが、街に通り始めて暫くすると、賑やかで煌びやかな街の様子は、ナジムの心に、全く違う姿となって現れ始めます。

ナジムはそこに大きな疑問を抱き、母サラにその理由を問います……が、サラは、突然敵しい顔になると、その理由こそ、あなたが解決しなければならぬ問題であり、その理由を識りなければ街の外に行きなさい――と、ナジムに告げます。

ナジムは、突然言い渡された重責に苦しみますが、意を決したある日、街を抜けて、その場所に立ちます。

そして、其処に広がる光景を前に、ナジムの足は釘付けにされてしまいます……